

福島県にあるJR二本松駅を降りると「よく来らったなし」の横断幕が迎えてくれます。NHK大河ドラマ「八重の桜」で耳慣れた優しい方言です。二本松市は二本松城の城下町です。二本松城(別名・霞ヶ城)は室町時代中期・嘉吉年間(1441~1443)に奥州探題畠山満泰が築城した後、上杉氏、蒲生氏、加藤氏によって治められ、寛永二十年(1843)に丹羽光重が初代二本松藩主として居城してから明治まで十代を数えまして。土地の方によれば、節分の「おにはそと」は「にわ」のお殿様をはばかりお年寄りも子供も「おに、そと」と言うほど領民に愛されたお殿様だったそうです。その二本松城も慶応四年(1868)の戊辰戦争のさなか新政府軍の攻撃によって、十三歳から十七歳の少年兵たちが命を落とした悲劇の城でもあります。今は城壁がわずかに残っているだけです。かつては平地から急こう配を上がる自然の要塞、城山です。山頂からは安達太良山(1699m)、鉄山(1709m)を始めとする雄大な安達太良連邦や、阿武隈川のゆるやかな流れが見渡せます。流れがちようど迂回したあたりの河川沿いに目的の安達ヶ原が望めました。

「黒塚」の鬼女がすみかとした岩屋のある場所には、天台宗真弓山観世寺が建立され、開祖は能「黒塚」のワキとして登場する阿闍梨、祐慶東光坊です。境内には阿弥陀如来を本尊とした観世寺本堂のほか、鬼女が使用したとされる遺物や縁起絵を展示した宝物館、「みちのくの 安達ヶ原の黒塚に 鬼こもりと 聞くはまことか」の平兼盛の歌碑などがありました。寺の縁起によれば、安達ヶ原の鬼女は、もとは都仕えをする女でしたが、主人のために誤って自分の娘と孫を手にかけてしまったために気がふれ、旅人を殺めては食らう鬼女となったと書かれています。主人のために信じて行ったことが、不幸を招いてしまった。能には女が鬼女となった具体的ないきさつには少しも触れていません。能の作者は、誰もが持っている「鬼」の心と、それを否定する「人」の心の葛藤という普遍的なテーマに焦点を当てたのかもしれない。

「黒塚」は二年前の五月にも訪れ、今回で二回目です。震災の大きな揺れにも、鬼女の岩屋は少しも動かなかったと聞きました。安達ヶ原の鬼というイメージとは逆に、安達太良山の風景も二本松の方たちもゆったりと温かく迎えてくれ、またここも行きたい謡跡のひとつとなりました。

平成二十五年 長月吉日

←JR 二本松駅



↓二本松城跡
二本松少年隊の戦う姿が銅像に刻まれている。



↓二本松城跡から安達ヶ原方向を望む。城跡は360度周囲を山に囲まれる。



↑天台宗真弓山観世寺入口
「名所 鬼女伝説の霊場 奥州安達ヶ原黒塚」の看板が目をひく

←鬼女が棲んだとされる岩屋
巨岩が折り重なっている



↓白真弓如意輪観音堂



←鬼女が葬られたとされる「黒塚」
阿武隈川河川敷きに立つ

